

重度自閉症者支援における関係づくり

狭 間 香代子・辻 井 善 弘

はじめに

自閉症の研究は進展しており、近年では「自閉症スペクトラム」という広範囲な枠組みで捉えられている。本論で取り上げる重度自閉症者とは、知的障害を伴う自閉症者の意味で用い、これらの人々の多くは障害福祉サービス事業所での生活介護サービスや就労継続支援B型などのサービスを利用している。

自閉症支援においては、TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication Handicapped Children) プログラムが開発されて、わが国にも広く導入されている。多くの障害福祉サービス事業所においても導入が図られており、TEACCHの特徴の一つである「構造化」を組み込んだ支援が行われている。TEACCHでは、支援の理念を含む基本原則を明確に示しており、その上に構造化プログラムが開発されてきている。しかし、自閉症の特性の一つが人間関係やコミュニケーションの困難さであるがために、支援者が関係づくりを避けて環境の構造化を優先させる傾向が見受けられる。

筆者の一人である辻井は、障害福祉サービス事業所に勤務しており、多くの重度自閉症者の支援に関わってきた。その経験の中で、重度自閉症者支援の根底にあるものは、関係づくりであり、それが支援の方向を決定するのではないかと考えた。

以上のような問題意識から、本論では自閉症者との関係づくりや内的世界の理解の重要性を指摘し、支援者が持つべき支援の基本的視点について

明らかにすることを目的とする。

なお、本論で取り上げる事例などについては、「日本社会福祉学会研究倫理指針」に則り、個人が特定できないように、論文の主旨を損なわない範囲で加工している。また、筆者（辻井）が所属する社会福祉法人から記載の許可を得ている。

I. 「自閉症」の障害特性

1. 自閉症研究の展開

自閉症の概念が研究として登場したのは、1940年代であり、米国でのカナー（Kanner, L.）の研究に始まる。また、ほぼ同時期にオーストリアではアスペルガー（Asperger, H.）が「子どもの自閉性精神病質」という報告を行った。これらの研究を端緒として、自閉症研究は著しく進展し、1970年代にウィング（Wing, L.）がカナーのいうタイプもアスペルガーのタイプも含めて、自閉症スペクトラムという概念を構築し、今日に至っている。

自閉症についての様々な研究を通して、ウィングは、自閉症スペクトラムの全体は「社会的相互作用」「コミュニケーション」「想像力」という3つの心理機能の側面（三つ組み）の障害であり、それに他の身体障害や心理障害等と合併して起こることもあるが、これはあらゆるレベルで見られるとしている。この「三つ組み」は自閉症の基本的な障害であり、自閉症のみにみられる特徴として多くの研究者から認められている。以下にウィングのいう三つ組みの特徴を挙げる（小野・上野・藤田2010：92-3）。

(1) 社会性の障害（対人的相互反応の障害）

視線を合わせない、視線を避ける、人を避けるなどの傾向のことである。さらに、人に合わせて行動する、集団で行動することも難しい。また、共感性が乏しく、人と喜んだり、悲しんだり、感動したりといった感情の共有の困難さがある。いわゆる「空気が読めない」といったことである。

(2) コミュニケーションに関する障害

言語性、非言語性コミュニケーションの双方に障害があるが、言語性により強い障害がある。中でも言葉を話すことに障害が目立つ。一般的には視覚的情報の方が理解しやすい。身振り、文字カード、絵カード、写真、実物などを利用してうまく伝達できることもある。

(3) 想像力に関する障害

先の見通しが立てにくい、具体的な見通しが立たないために不安が強い、慣れない環境は苦手で応用が利かない、ごっこ遊びが苦手である、などの特徴がある。この特徴を理解して、見通しがもてるように支援し、曖昧で抽象的な言い方を避けて、できるだけ具体的に伝えることも必要である。

2. 自閉症者の具体的な行動特性

「三つ組み」の特徴は具体的な支援の場では、支援者の困ったと感じる行動とも言い換えることができる。藤原加奈江は、支援者が感じる「困った」が大切な支援の種であると述べている（2009：1）。筆者（辻井）も障害福祉サービス事業所に勤務し始めた当初は、その特異な行動にどう対応すればいいかわからないことがほとんどであり、「困った」と感じるものが度々であった。

それらの特異な行動について、藤原（2009：11-21）は10項目を挙げて整理している。それらは、「人よりも物への関心が強い」、「コミュニケーションが苦手」、「新しいことは不安」、「見えないとわかりにくい」、「注意のコントロールが困難」、「感覚刺激のコントロールが困難」、「感情のコントロールが困難」、「状況判断が苦手」、「計画を立てて実行するのが苦手」、「失敗から学びにくく、応用が苦手」といった特性である。

ここではこれらの特性を参考にしながら、具体的なエピソードと合わせて行動特性について述べる。

(1) 人より物に対する高い関心

人よりも物への興味が強く、また、相手の考えや気持ちを推測すること

が苦手という特徴である（藤原2009：11）。Lさんは自宅で行動の切り替えのたびにシャワーを浴び、決まった量のシャンプーを使用して母親に洗髪をさせ、風呂から出ると、濡れた体を拭く際、タオルを使用し決まった順序で拭き、洗い立ての下着に着替えるという行動を繰り返していた。この行動が一日に10回を超えるという。あるとき母親は高熱を出して寝込んでしまったことがあり、その時も寝込んでいる母親の手を引いて風呂場へ連れていき洗髪を強要したという。

(2) 個性的な意思疎通方法

独り言は言えるがコミュニケーションには使えない。また、要求や拒否は言葉を使うが、質問したり、語ったりはできない。さらには、言葉の意味のズレが起りやすく誤解が生じやすいといった特徴である（藤原2009：11）。

Mさんは単語のみで相手に思いを伝えることができたが、相手からの言葉での伝達は理解できなかった。公園の草を抜く作業の中で、声掛けだけでは、集中して取り組むことができなかった。この時に、職員がフラフープを草の上に置いたのである。そしてそのフラフープの中を除草する姿をMさんに見せ、作業を促した。すると行動が一変し集中して取り組み始めた。つまり、言葉がけだけでは、効果を示すことが難しいのである。

(3) 未経験及び急変する環境に対する受容困難

新しいことや場所は不安強い。慣れ親しんだものや見通しが確実につくものに執着があり、それを繰り返そうとする。これが“こだわりが強い”と表現される（藤原2009：11-2）。公園などを利用者と散歩するときなど、犬を散歩させる人とすれ違う。時には飼い主のいない野良犬も見かける。利用者の多くは犬たちとすれ違うたびに顔をしかめておびえた表情を浮かべ、職員の手を握りしめ、できる限り犬と接触をしないようにする。このことから、犬などの動きを読むことが難しい動物の場合、見通しがつきにくく、それが不安を呼び起こしていると考えられる。

(4) 視覚情報優位

視覚で捉えられないものはわかりにくく、話し言葉などは苦手である。また、気持ちや暗黙のルールはわかりにくい。物の位置が変わることに対して、過剰に視覚情報に頼り混乱する（藤原2009：12）。Nさんは物の位置が変わると自身の手の甲を噛んで（自傷行動）、怒りを表現する。ある時施設の改修工事が行われることになり、入り口の場所が変更された。このためにNさんは混乱し、自傷行動が頻回した。この例は視覚情報の変化が混乱を招いたケースである。

(5) 思考的視野狭窄

注意のコントロールが困難であり、興味のある所にのみ注意が行くのと同時に全体を見ることが苦手である。また、刺激を比較して選択することや、次に切り替えることが苦手である（藤原2009：14）。

昼食は12時に決まっており、利用者たちは食堂へ集まる。ある日、他の人は食堂へ移動し始めたが、Oさんは食堂に移動せず、作業を続けていた。そこでOさんに声をかけ、給食であることを言葉と絵カードで伝えて、食堂へと促した。実は、その日は12時を知らせるチャイムが故障のため鳴らなかったのである。Oさんは、行動の切り替えにチャイムの音を頼りにしていたため、周囲の人たちが食堂へ移動する光景は見る事ができる環境であったにもかかわらず、場面切り替えには通用しなかった。

(6) 感覚過敏及び低下

感覚刺激のコントロールが困難であり、感覚の過敏や低下あるいは異質が認められる。また、自分が辛いことを他者に伝えにくく、好きなことに没頭するため「わがまま」と誤解されることが多い（藤原2009：17）。

ある時、利用者の一人が施設から行方不明になり捜索が行われた。その利用者は「きらきら光るものや光景を好む」という特徴があり、見失った施設の周辺で光のさす場所を特定した捜索が行われた。結局、海岸で発見されたが、夕暮れ時の海を眺めていたという。視覚の過敏さが現れる例であった。

(7) 感情調節困難

感情のコントロールが困難であり、テンションがいったん上がるとなかなか戻らない。そして、他者の思いを推測することが苦手である（藤原2009：19）。

発語はないが、Pさんは簡単な生活用語は理解することができた。また、食べることに對して強い執着があった。バーベキューの準備段階で、Pさんは置いてあった肉を取り出し、職員に「焼いて」と言わんばかりな様子を見せた。職員がまだ焼くことができないと伝えると、手に持っていた肉のパックを放り投げパニック状態になった。さらに周囲の物を壊す行動が見られたため、1人になれる別室に移動させた。パニックになった背景には、焼いてほしいと思ったことがかなわなかったことがある。感情のコントロールが難しいため、刺激の少ない別室でテンションを鎮める支援が必要であった。周囲の状況や他者の思いを推測することも難しいことがわかる。

(8) 指示待ち傾向

状況判断などのその場に適した行動をとるのが苦手である。また、表情に変化をつけても意味の違いを理解できない（藤原2009：19）。

Qさんは、行動場面切り替えの際、必ず近くにいる人に対して「いい」という。これは、他者から「いいよ」と返答されることを待つ行動である。状態観察のため、感情をこめて「いいよ」という場合、そっけなく「いいよ」という場合などいろいろな言い方を試してみた。その結果、Qさんは「いいよ」と返答するまで「いい」と聞き続けた。また、「いいよ」という文言であれば抑揚がなくても聞き入れた。つまり、表情に変化をつけても意味の違いはなく人の感情を察知できないことを示している。

(9) 適当概念の欠如

計画を立てて実行することが苦手であり、自由な時間の意味が理解できず不安定になる。また、やりたいことがあると後先を考えずに突進し、制限なく続けることが多い（藤原2009：20）。

Rさんは休憩時間に職員から「休憩だから自由に過ごしてください」と

声をかけられ、園庭には出るが、その時間をどう過ごしていいのか困惑した様子であった。そこで塗り絵を提供した。もともと色塗りが得意であったRさんは、それ以降、休憩時に塗り絵に取り組むことが日課となっている。

(10) 学習能力の欠如

失敗から学びにくく応用が苦手であり、何かを始めて失敗するとパニックになる。また、注意を受けすぎて自信をなくしていることもある（藤原2009：21）。

ネジ釘の真ん中あたりまでナットを装着するという新しい作業に取り組むことになった。そこで、細かな作業が得意なSさんに支援員が作業工程の手本を見せると、すぐにやり始めた。しかし、ネジ釘の最後までナットを装着してしまい、途中で止められない。その後、途中で止めることができるような治具を作製すると、Sさんはできるようになった。

3. 福祉現場での支援の課題

以上のように、自閉症者の特異な行動に対して様々な支援が試みられている。近年では、多くの障害者福祉事業所では、支援方法としてTEACCHプログラムを導入している。筆者（辻井）が勤務する事業所においても、積極的に取り入れている。しかし、利用者の多くは発語がないため、支援者が本人の意思を理解することが困難であり、TEACCHがいう環境の整備などの構造化を中心とした取り組みが多くなる。換言すると、単に物理的環境を仕切ったりすることで対応できていると考えがちである。TEACCHが提起する構造化の意味を十分に実践において活用できているかが問われる。そこで改めて、TEACCHプログラムの基本的な考えを検討した上で、福祉現場で同プログラムを活かす支援を検討したい。

Ⅱ. 自閉症と TEACCH プログラム

1. TEACCH プログラムとは何か

自閉症の本質に関する研究と並行して、療育の方法についても研究が進展している。自閉症者のレベルや能力に関係なく教育を通して、生活の質をこれまで以上に改善することが可能になっている。この代表的な研究が TEACCH プログラムである。ここでは、このプログラムの基本的な考え方、具体的な方法である構造化などについて取り上げる。

(1) 基本原理

TEACCH は自閉症の人たちへの支援方法として世界中で実践され、わが国でも教育、福祉の領域で広く導入されている。この方法は米国のノースカロライナ大学医学部のショプラー（Schopler, E.）を中心に研究開発されたものである。

1960年代の米国では自閉症治療の中心的方法は精神分析理論に基づく方法であった。しかし、ショプラーはこれに疑問をもち、自閉症は情緒障害ではなく、知覚情報の処理の問題であると考え、この立場から実証研究を始める。さらに、この研究を通して、教育によって自閉症に伴う障害を改善・変容することが可能であると考え、TEACCHの研究へと展開した（メジボフ他＝服巻2007：21）。

TEACCH はわが国にも早くから導入されており、教育や福祉の領域で広く活用されている。その基本的な考え方は次のように説明される（佐々木2008：37）。

- ① 自閉症は中枢神経系を含む器質的な障害であり、それが認知一知覚機能に影響している。
- ② 療育は家族と専門家の協力関係で実施する。
- ③ 療育者はジェネラリストである。
- ④ 療育プログラムは包括的に調整される。
- ⑤ 人生全般にわたって支援される。

⑥療育は個別化の概念の下で行われる。

自閉症は長く親の養育態度の問題だとされ、多くの親を苦しめてきた。自閉症研究の進展に伴い、自閉症の原因は脳の器質的な機能不全であって、それが認知や行動に影響していると見なされるようになった。TEACCHでは、親は療育における協働者であり、親と療育者（支援者）との協力関係が重要視されている。

自閉症の子どもの療育については、様々な領域の専門家が関わっている。それらの専門家はスペシャリストとしての知識やスキルを基盤にして教育していく。しかし、TEACCHでは家族の状況も含めて、総合的な視点からの療育を行うジェネラリストが求められる。自閉症に関する知識、子どもや家族のニーズなども把握することが必要である。

また、療育者はジェネラリストであるとともに、子どもの発達全体も視野に入れる。就学時だけの療育ではなく、青年期、成人期も含めて支援する視座を持たなければならない。わが国では、教育は学校を中心にしてなされるが、その後の社会人としての生活の場についてみると、多くの重度自閉症者は福祉の場にいる。福祉での支援と学校での教育とが一貫性をもってなされるためには、包括的な視点をもつコーディネーターが必要である。

2. TEACCHによる療育方法

(1) TEACCHの原則

自閉症児・者へのTEACCHの具体的な療育を実施していくために、支援の原則が挙げられている（メジポフ他＝服巻2007：54-7）。第1は、「慎重かつ継続的なアセスメント」である。一般的に対人援助でのアセスメントとは、クライアントのニーズを明確にするための情報の収集と分析のことをいうが、TEACCHでは、自閉症の人が「自らの経験の意味をどのように理解しているかを評価すること」とされる（メジポフ他＝服巻2007：55）。自閉症の人は意味の理解が困難であるがゆえに、この点についての療育者のアセスメント能力が問われる。

第2は、「強みや興味関心を用いる」ことである。対人援助の一つであるソーシャルワークでは「ストレングス視点」を強調している。ストレングスは「強み」と訳される場合が多いが、ストレングス視点は本人がもつ様々な「もの」や「こと」を肯定的に捉え直すことで、エンパワメントにつながる支援である。TEACCHにおいても同様に、自閉症の人の障害と見なされる特性を社会的に適応できるように転換させることをいう。例えば、視覚的細部に注意を向けるという特性を就労の場で活かす等の取り組みが紹介されている（メジポフ他＝服巻2007：56）。

第3は、「家族との協働」である。これはプログラム計画が「家庭環境や大人になった時に生活するだろう環境に配慮したもの」であることをいう（メジポフ他＝服巻2007：57）。上述のように、療育支援は人生全体を視野に入れたものでなければならない。その意味では、学校だけの有効な方法ではなく、「新しい環境への般化を促進する」ことが重要である（メジポフ他＝服巻2007：57）。療育の場だけで通用するようでは十分ではない。

(2) 構造化による支援

TEACCHの支援として最も特徴的な方法が構造化である。これは、「物理的環境と活動の順序性の積極的な整理統合と指示」を意味する（メジポフ他＝服巻2007：61）。認知一知覚に障害がある自閉症の人たちが、自らの生活や学習の場を理解するためには、生活や学習における環境の意味を分かりやすくしなければならぬ。そのために、視覚的構造化が行われており、このことによって周りで何が起きているのかを分かりやすく提示できる。

構造化には、場面の物理的構造化とスケジュールの構造化がある。まず、場面の物理的構造化とは、住宅内や学校の教室をついで家具などで仕切ったり、囲ったりして区画を明確にすることである。それによって、一つの場が一つの活動と対になり、各々の場で何をすることが明確に視覚的に示される。特に、環境の意味を視覚的に示すことや同一場を多目的に使用しないことなどが重要である。

スケジュールの構造化とは、自閉症の人が活動の手順を予測できるように、視覚的手段を用いて伝えることである。予測性が不確実性を減少させ、不安や緊張を抑える。学校では、一日の学習活動を絵やイラスト、写真、文字、実物などを用いて視覚的にスケジュールとして示す。これは「場面の切り替え」にも有効である。

(3) コミュニケーション指導と支援

自閉症者はコミュニケーションに困難があるために、自閉症者は話せないし、話さないのだから無視してもよいと結論づける支援者も多い（メジポフ他＝服巻2007：93）。しかし、自閉症者にとってもコミュニケーションは重要である。彼らのニーズは何か、どのような人柄なのかを知ることが必要である。また、彼らにとって、他者からの情報を理解できれば、自分の世界を秩序づけることもできるし、自分を表現し、周囲の人を理解することも可能になる。

コミュニケーションスキルを促進するために、TEACCHでは様々なレベルでの手段を提起している。話し言葉を持たない、または少ない自閉症者へのコミュニケーション指導では、具体物を示すことを優先させる。例えば、食事の時間を示すには、スプーンやコップという具体物を食事の前に見せたり、持たせたりすることで、食事時間ということを理解させる。

具体物の次に用いられるのが線画、絵、写真である。具体物を描いた単純な線画や雑誌などの写真や絵で示すという方法である。さらに、文字で書いた単語も利用できる。文字で書かれた単語と意味を関連づけることがすぐに可能ではないが、学習を進めることで可能になることもあり、順序立てて進めていく必要がある。

自閉症者には、理解力の制限、社会的コミュニケーションの意図の欠如、開始行動を含む全般的理解の困難、特異的な聴覚処理の問題、知的障害などの要因が背景にあり、言語スキルの発達が妨げられている（メジポフ他＝服巻2007：110）。そのために、視覚的な手段を活用しながら、コミュニケーションを図っていくのである。

以上、TEACCH プログラムの特徴である構造化を中心に取り上げた。これらの構造化の方法を活用していくためには、根底に自閉症者の個性の重視や経験の意味の理解があることを支援者は忘れてはならない。

Ⅲ. 事例にみる重度自閉症者への支援

重度知的障害を伴う自閉症の人たちの行動は他者に不快な思いをさせることもあり、多くの人は叱責を受けたり、“厄介な人”というレッテルを貼られたりしたまま、家庭と施設のみでの生活を強いられている。

筆者（辻井）は、これらの人々の様々な特異な行動には必ず理由が存在すると仮定し、行動を分析し活用できる支援を考えながら関わっている。以下の2つの事例は「不適応行動」を課題としたものであり、具体的な支援を紹介しながら、支援のあり方について検討する。

1. 【事例1】「Aさん 施設にて全裸になり再度着衣する行動」

Aさん：知的障害（重度）を伴う自閉症

(1) 状態像

発語はないが、生活経験から指示系言語の意味理解度は高い。一日の予定はスケジュールボードを利用し、規則正しい生活が基本である。

(2) 当時の様子および支援

① 焦点化した行動

Aさんが利用する施設では、朝9時に集まり、10時の作業開始時間まで全体での朝礼とフリーの時間が設けられていた。行動の始まりはそのフリーな時間であった。他者も大勢いるフロアにおいて、着ていた服を脱ぎ、全裸になった。そしてその場で一枚ずつ着衣し始めたのである。発見した支援員は、まだ着衣の途中であった本人に対して更衣室への移動を促し、その後着衣の見守りを行った。更衣室への移動および更衣室内での更衣についてはスムーズに行なわれ、特に支援が必要なことはな

かった。

② 行動の問題点

この一連の行動における問題点は、集団がいる場面で全裸になることである。町の中でこのようなことをすると理由はどうあれ罪に問われることから、施設内でも不適切な行動である。しかし、普段はそのような行動のなかったAさんが、なぜ行ったのだろうか。必ず理由が存在すると考え、このような行動を防ぐために支援方法を検討した。

③ 行動前の確認と考察

当日の家庭での様子を知るために母親へのインタビューを行った。母親は、いつもは7時に起床して8時半に自宅を出発するのだが、その日は母親が寝過ごしたため起床が8時と遅くなり、母が急いで寝間着から普段着へ着衣させ送迎の車に乗せたという。

行動の順序が変わってしまい、これを納得するためにとった本人なりの方法ではないだろうかと仮定し、Aさんの起床からの行動観察の必要があると判断した。

(3) 起床後の行動分析

母親からの情報で、通所前の家庭での行動に手がかりがあると考え、時間の制約がない日に家庭を訪問し、起床からの本人の行動を観察した。観察の結果、施設に来る前に家庭で行う行動は10通りあることが分かった。流れに沿って①～⑩の順で記載する。

- ①起床（7時） ②トイレ ③食器をテーブルに並べる（スプーン大1・スプーン小1・フォーク大1・フォーク小1・箸1対・皿中2枚・お椀1つ） ④朝食喫食 ⑤排泄 ⑥歯磨き・洗顔 ⑦更衣
⑧ぬいぐるみ5体・洗濯鉢12個を様々な場所に置く行動 ⑨連絡帳が入った袋を持つ ⑩出発（8時半）

母親への聞き取りによると、朝のこの順序は毎日同じであり、必ず8時

半に自宅を出発できるという。出来事があった当日は、起床が8時であったことから、上記①～⑩の中で⑦の更衣について母親が着衣させ、送迎車に乗せたことが分かった。

(4) 考察

送迎時間に追いつかせるためにとった母親の関わりは、本人にとってやり残した行動であることが推察される。「そこで裸になるのはダメ」「更衣をする時間ではない」など、その行動が起こっている段階で注意するなどの行動の抑制を行うのではなく、その行動の原因や本人の思いなどを推測し、あらかじめ本人の行動順序を理解したうえで関わるのが大切である。

その後、起床時間を7時に一定化し、順序通りに支援を進めることで施設で場所を選ばず全裸になり更衣をし始めることはなくなった。また、整理した行動内容は、支援者が準備した行動内容ではなく、本人が行っている行動を観察した結果であることが、この行動の再発を防いだのである。

注意すべき点は、10通りの行動とは別に必要とは思われない行動を本人が追加するときである。支援者はその変化にいち早く気づき、11個目の行動に加えないように促す必要がある。さもなければ、特別な予定に納得して間に合わない日が出てくるかもしれない。行動内容の増加を防ぐには、支援者は行動順序を把握しておかなければならない。また、支援者間で情報を共有しておくことで、本人の行動変化を伝え合い、都度の修正を図ることができる。

しかし、誰でも生活の中で新たな興味関心ができることは当然であり、重度自閉症者の場合に、それが必要かそうでないか等のニーズ確認のためには、支援者間で常に情報共有を図っておく必要がある。行動パターンは本人にとって必要な生活習慣であり、その価値を知るのは本人である。社会のルール等を考慮し、本人の意思やニーズを理解し、明確にした上で支援することが重要である。

2. 【事例2】「Bさん 固執行動」

Bさん：知的障害（重度）を伴う自閉症

(1) 状態像

発語なし。他者からの言葉は、日常生活用語全般を理解している。他者が着ている洋服のボタンを見るとはずしに行く行動がある。そのために上着で顔一面を覆っており、他者から顔が見えない。

(2) 当時の様子および支援

① 焦点化した行動

制止されてきた行動の中に、他者のボタンを触りに行く行動があった。他者が着ているYシャツ等のボタンがきっちり上まで閉まっていない状態を本人が見つけると、周囲を気にせず、相手の性別や体格も気にすることなく外れているボタンを閉めようとするのである。

② 行動の問題点

この行動をすると必ずトラブルに見舞われ、叱責されることも多く、生活上の躓きであった。その経験からCさんは他者を見ないように衣服を頭からかぶるようになった。

③ 当初の配慮

当初は、支援者や関わる人達ができるだけボタン付きの服を着ないようにすることや、本人にボタンを見せないようにして支援を試みた。しかし、生活の中で完全にはできず、トラブル回避まではいかなかった。次第に移動支援サービスを利用することもできなくなり、家庭と施設の中で過ごすことしかできない生活に迫られてしまった。

(3) 支援内容とその後の経過

視覚的にボタンを見せない支援を継続することに頭打ちを感じていた筆者（辻井）は、逆にボタンを箱に詰め、それを常にカバンに忍ばせるようにしていつでも本人が触れるように試みた。しかし、この取り組みではボタンを提供する時間が特定できなかったため、常にボタンを作業机に出したが、これでは予定している次の行動への促しを困難にする結果となった。

卓上でボタンを嬉しそうに触る様子が見られたため、次に色分けの治具を準備し、ボタンを色分けすること、さらにそれを袋に詰めて作業完了という流れを1セットとして提供した。すると、色の識別が可能であり、きっちりと課題をこなした。

そんな様子から工賃をもらえるボタンの作業がないかと考え、購入してきたボタンのパッケージに記載されている製造業者に連絡した。幸いなことに、一つの業者が協力してくれることになり、ボタンの選別と袋詰めおよびラベル貼りの仕事を受注することができた。その後、本人は他者のボタンに執着することが減り、移動支援も利用できるようになっている。

(4) 考察

本人が執着するものを生活上の問題ととらえるのではなく、執着するほど好きなものであるととらえ直してから支援方法を考え始めたことが、結果に反映されたケースである。

本人は取り巻く人々などの環境が理解できず、ボタンに対してのみ執着を示したわけだが、言葉はなくても本人の様子から「洋服のボタンはきっちり閉めなければならない。しめないのなら着るな。ボタンは袋にしましましょう」と言っていると仮説を立てた。結果的には、他者から叱責を受け続けながらしていた行動があったからこそ収入を得られるような作業に出会うことができ、わずかではあるが工賃も得るようになった。

他者から見るとよくない行動ととられるような場合でも、発想の転換でプラスに転じる行動もあることから、一見の観察で判断してしまわないことが重要である。

3. TEACCHの視座からの事例分析

(1) 代替的行動の提示

上記の2つの事例は、自閉症者の「不適応行動」に関するものである。不適応行動には、「固執」「執着」といわれる行動、またかんしゃくとかパニックといわれる感情爆発などがあり、これらの行動に対してTEACCH

では、代替的行動の提示、再構造化、原因を探るなどの方法を示している。

「何かの行動を中止するように導く場合には、それに代わって何をすればよいのかを、必ず彼らが理解できるように提示して、しかもその新たな活動ができるように指導しなければならない」（佐々木2008：187）。つまり、単なる行動の禁止ではなく、必ず代替的な行動を示し、それらに取り組みのように支援することが必要である。そのためには、構造化の方法で対応していくが、場面、状況、経過や前後関係などの文脈を調整し、どう再構築するかが課題である。

Aさんの事例は、なぜ、突然に異常な行動が生じたのかという原因を探り、その結果、家庭での生活の段取りが違った時に生じたものと判断した。そこで、事業所内だけのスケジュールの構造化だけでなく、家庭内でのスケジュールを見直し、再構造化を行ったと説明できる。

Bさんの例は、周囲から許容されない行動を、置かれている環境を変化させることで、許容できる行動にしたのである。ボタンを触るという行動自体を変化させたり、禁止したりすることはせずに、許容される環境づくりをした例である。これは「リフレイミング」の方法を活用したということもできる。

(2) 経験の意味の理解

事例では、利用者本人のニーズや思いを理解する工夫を様々に行っている。利用者の発語がないために、言語によるコミュニケーションが難しい。その代わりに利用者の行動を観察したり、支援者間での情報共有の徹底化を図ったりしている。

上述のように、TEACCHの基本原則では、自閉症者が「自らの経験の意味をどのように理解しているかを評価すること」が挙げられているが、2つの事例においても、支援者は利用者の行動の背景にある意味を理解しようとしている。

TEACCHアプローチの特徴は、自閉症者の理解が困難な表面化している行動には、水面下の見えない部分に症状などの引き金となるメカニズム

があり、その理解を深め、働きかけていくこと、そのためにはその人の立場にたって、それを真剣に見極めて解決していくことにある（田川2002：43）。つまり、自閉症者の支援においては、引き金となるメカニズムを理解するとともに、かれらの経験の意味を「その人の立場」で理解することが重要である。

このように TEACCH は自閉症の原因となる医学的メカニズムを理解することと、本人の経験の意味を理解することを求めている。換言すると、前者は自閉症についての知識を持つことであり、後者は支援者の持つべき支援の視点を意味しているといえる。

IV. 支援者がもつべき視点

1. 知識・価値・スキル

自閉症者の支援において支援者に求められることは、自閉症の原因についての医学的メカニズムなどの知識、構造化として集約されるスキル、利用者を理解しようとする支援者の価値である。

TEACCH においては、自閉症の原因を脳の器質的障害とみなし、そこから派生する種々の症状に対して、構造化のアイデアを多様に創出しながら、支援プログラムを形成している。発症メカニズム研究の進展とともに、きわめて実証的な支援方法が提示されている。また、自閉症者の支援においては、TEACCH の基本原則に示されるように、個別性、経験の意味の理解などの価値が根底にある。構造化の方法、スキルは、医学的な知見とともに価値を基盤として構築されているのである。

しかし、支援の場での構造化のアイデアが画期的であるだけに、このスキルのみを取り込もうとしているところも見られる。上岡一世は、「どれだけ構造化を理解した取り組みが行われているか」というやや疑問である。構造化という言葉だけが先行し、子どもが置き去りにされているのではないか」（上岡2011：9）と指摘している。このことは自閉症者の支援を行う

福祉の場でも同様である。マニュアル化しやすい構造化のスキルだけが独り歩きして、その基盤にあるべき価値、支援者の姿勢を疎かにする傾向も見られる。特に、発語のない利用者の場合には、コミュニケーションを取ることが困難だけに、人間関係づくりを2次的な位置において、構造化を行っている状況も見受けられる。何よりも大切なことは、自閉症者といかに人間関係を構築するかということである。

2. 人間関係づくりと受容的交流理論

石井哲夫は、「受容的交流理論」を提唱して、「自閉症のように、周囲に見える人をはじめとした環境にかかわろうとしない人たちに対して、その関わりを起こすためには、人を通して行われることが必要になる。つまり援助者は、利用者に向けて必要な人となるために、受容の基礎的理念に基づく援助行動としての交流を行う人になるのである」（石井1999：2）と述べている。

石井は、療育や福祉が目標とする価値として2つのフレームを挙げる。一つは「内的世界における自我的な働きとしての感覚、情緒によるフレーム」であり、他の一つは「外側世界から要請されてくる言葉を重視するフレーム」である（石井1999：1）。言葉の発達に困難がある自閉症者の場合には、後者のフレームからの働きかけには無関心さや否定的な感情を発生させることもある。このような状況になった自閉症者の関心は、専ら内的世界の感覚的、情緒的な処理に向くのである（石井1999：1）。

さらに、石井はこのような感覚、情緒的な面に関心を向けた自閉症者に対して、「構造化するとは自閉症の認知を容易にしていくことに効果があるが、そこに他の人間との交流を主としなくなることを問題としなければならない」と述べている。構造化の前提に人間関係の交流があることを強調しているのである（石井1999：3）。このように、石井は言葉によるコミュニケーションが困難であり、人との関りを苦手とする人たちに対してこそ、何よりも関係づくりが重要であるとしている。

具体的に、石井は「援助者は利用者に対して、その内面のカオス状態にある心理世界に向けて、利用者本人の行動指向に関わるフレームづくりを考える交流が必要になってくる。利用者本人が何を見て注意し、どういうことを求めて行為していくかという問題を考えてみる必要があるのである。そこから利用者にとって適切な行動フレームの発見ができる」（石井1999：1）とも述べている。つまり、利用者の行為、行動に対して常に注意と関心に向けて、観察していくことが支援者に求められるのである。しかも、その観察は単に見ているというのではなく、利用者にとっての行動フレームの発見を目指したものでなければならないのである。

石井は支援者が考える利用者の行動フレームとして次の3つのフレームを提案している（石井1999：4）。第1は、「安定化のためのフレーム」である。これは利用者の不安定で動揺する内的世界を安定させようとするものである。そのためには、利用者の感覚・情緒的な働きを観察していくことであり、「不安が高じて混乱しているときなどは、なだめるための方法として、こちらの態度や掛け声の調整を調節したり、原因と思われる事柄に関して、それを取り除いたりわかりやすいように説明して、気持ちの安定や気分転換を図ることができればよい」というように、利用者の感情の動きをしっかりと見据えて、様々な働きかけをしていくのである。

第2は、「抑制のためのフレーム」である。これは自閉症者が自分の行動を抑制しなければならないということを感じるために必要なフレームである。このフレームを築くきっかけは「失敗体験」にある。この体験を上手く活かして、行動抑制を体得できるよう支援する。そのためには、自閉症者が感じている感覚、情緒の動向を知ることが大切とされる。

例えば、前章の【事例1】のAさんの場合、ある日突然、事業所内で衣服を脱ぎ始め、周囲を慌てさせる。そのような行為に至った原因は、事業所に来る前の自宅での通常の手順が違っていたことで、「やり残し感」があり、それが奇異な行為となった。しかし、「やり残し感」を解消する行為が、逆に周りの者を驚かせたり、また叱責を受けたりしたことは、彼に何

らかの不安定な感情を引き起こしたと考えられる。このような機会を上手く利用して抑制フレームを構築できるような支援が必要である。

第3は、「促進のためのフレーム」である。行動抑制のフレームはできるだけ避けて、前向きにやりたいこと、楽しいことを増やしていくためのフレームである。そのためには、「許容・肯定・支持・賞賛などの積極的な評価や好意的な関わりによってもたらされる自己肯定、あるいは自尊心の形成」を促すような支援が求められる（石井1999：4）。

3. 重度自閉症者支援に必要な視点

石井は、受容的交流に関連して、「コントロール型思考」と「ネットワーク型思考」という概念を示して、自閉症者の支援での後者の重要性を指摘している（石井2006：1092-4）。

コントロール型思考とは、「人に対してその言動を如何に此方の求める行動やフレーム（行動の枠）に一致するように相手の行動をコントロールしていく」ということである。一方で、ネットワーク型思考とは「相手の情緒や認知を思い量りながら、その人との結びつき（絆）を大事にしておくこと」である（石井2006：1093）。

筆者（辻井）の経験した事例と照らし合わせると、自閉症の人々が社会で暮らすためには育まれた感覚および情緒の文化の中で、喜怒哀楽などの感情表現を経験し、生きる力を養うことが重要である。前章で紹介した2つの事例は、それぞれの人がわずかでも表現する表情やしぐさ等の変化を読み取り、想像してアプローチした結果がその後の生活を豊かにさせたといえる。自閉症者は関わられることを苦手とするが、表情や行動に見られるわずかな変化を見守ることが支援者として必要である。

このことは、前章【事例2】で紹介したBさんの事例に表れている。【事例2】をより具体的に振り返ると、Bさんは他人が着衣している洋服のボタンを触りに行くことにこだわり、幼少期より周囲の人たちから叱責を受けることが多かった。生活介護事業所を利用し始めた18歳のころは、その

生活経験における行動を自ら抑制するためであろうか、Tシャツや上着を頭から覆いかぶせるように着用し、その隙間からわずかに見える地面だけを見て移動する状況であった。

保護者や支援学校の教員からの引継ぎによると、他人のボタンを見てしまうと必ず触りに行きたくなる衝動に駆られ、抑制が効かなくなるので、服を頭から覆いかぶせるような状況に促したということであった。これはまさにコントロール型思考である。

支援学校を卒業したBさんを生活介護事業所で受け入れた筆者（辻井）は、そのCさんの様子が社会生活を行う上での違和感ととらえ、上着から首を出し、顔をしっかりと上げて移動できないかと考えた。上着を覆いかぶせた状態では、前述した受容的交流理論を実践することも不可能であり、何より、人との関わりが失われる。

この生活介護事業所では、『障害が重くても働く』をキャッチフレーズに、多種の企業と提携した内職作業を行っていた。その作業選択及び提供方法は、例えば一つのを完成させるために作業工程を細分化し、その細分化した箇所が利用者の特性や得意に沿っていることが条件であった。

しかし、既存の作業の中にはBさんが取り組める工程がなかった。そこで、雑貨屋から種類の様々なボタンを大量に仕入れ、弁当箱サイズの箱に詰め、Cさんの目前に提供した。するとCさんは上着で隠れていた顔を出し、微笑みながらやさしくボタンを触り始めた。そのとき隣にいた筆者（辻井）は、ボタン付きの服を着用していたがBさんに触られることはなかった。

このエピソードをきっかけに5つの段階を踏んだボタンの取り組みが始まった。5つの段階すべてに共通することとして、その時の表情や行動を観察し、作業に関わっていられる時間を計測した。

① ボタンに触れ、ひと時を過ごす。

特に指示は行わず、箱に数種類のボタンを敷き詰め、手に取って遊ぶのを観察する。

② 種類と色の分別に取り組む。

治具を作成して提供し、数種類あるボタンの仕分けができるかを観察する。

③ 数合わせに取り組む。

治具を作成して提供し、一袋に入れる個数を正確に数えられるかを観察する。

④ 袋入れに取り組む。

数えられたボタンを、袋に入れることができるかを観察する。また、向きをそろえることができるかも観察する。

⑤ ボタンを製造販売している企業より作業を入荷し取り組む。

雑貨店で販売されているボタンのパッケージ裏に書かれている製造元に片端から連絡し、ボタンに携わる作業の提供について交渉する。成立後入荷された作業を工程に分けて取り組む。

これはボタンを触ることにこだわりがあったために社会から排除されようとしていた状況から、そのボタンをきっかけに手に職をつけ、それがわずかでも収入を得るような形に発展した事例である。

ここでわかることは、コントロール型思考がいうフレームにはめるような支援方法ではなく、ネットワーク型思考で述べられている相手の状態に合わせて状況を整える支援方法の成果であるといえるであろう。

このとき、Bさんにとって弱みと思われていたボタンが実は強みであったことも見て取れる。これは支援者がBさんの強みを探して発見したのではなく、普段の生活の中に自然に存在していたことに想像力をもって支援者が気づいたことが成果となっている。

以上の事例での支援を踏まえて、重度自閉症者支援に必要な視点をあげる。

- ① 対象者を知り、それぞれ違う人であることを理解する。
- ② その場で起こる行動だけを見て対象者の思いを勝手に決めない。
- ③ 対象者の行動には理由が存在すると仮定する。
- ④ 対象者に関わる際、方法・技術に頼りすぎない。
- ⑤ 対象者の可能性を捨てない。

⑥ 想像力と創造力を豊かにする。

そして、何よりも支援者にとって優先すべきことは、自閉症者の内的世界を理解するために、彼らの世界に入り込むことである。それは彼らとの関わりをいかに構築するかということでもある。自閉症者の支援に従事する者は、人との関わりを行うことが人の暮らしの前提にあることを認識しておかなければならない。

おわりに

筆者（辻井）が障害福祉サービス事業所での自閉症者支援の中で得られた事例を取り上げながら、支援において優先されることは、人間関係づくりであることを論じた。人間関係やコミュニケーションが困難な人々との関係づくりは難しい。しかし、自閉症者の内的世界で支配的な感覚や情緒を受け止め、理解していくことが関係づくりの出発点である。

このことは、支援者にとっての根底にあるべき援助観であり、支援の価値に通底する。自閉症者の支援においては、この価値を基盤として、自閉症に関する知識や構造化の技法を活用していくことが求められる。

引用参考文献

- ・藤原加奈江（2009）『あなたが作る支援プラン 困った行動が教えてくれる自閉症スペクトラムの支援～7つのステップで対応方法を探る～』 診断と治療社。
- ・石井哲夫（1999）「受容的交流理論覚え書」『白梅学園短期大学 教育・福祉センター研究年報』 No.4、1-4、白梅学園短期大学。
- ・石井哲夫（2006）「これからの障害者支援 自閉症の人への支援を実践して得たもの」『教育と医学』 第54巻第12号、1092-1100。
- ・ゲーリー・メジポフ／ピクトリア・シェア／エリック・ショブラー編著、服巻智子／服巻繁訳（2007）『自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ TEACCHとは何か』 筒井書房。
- ・小野次朗・上野一彦・藤田継道編著（2010）『よくわかる発達障害 [第2版] LD・ADHD・高機能自閉症・アスペルガー症候群』 ミネルヴァ書房。

重度自閉症者支援における関係づくり

- ・ 佐々木正美 (2008)『自閉症児のためのTEACCHハンドブック 改訂新版自閉症療育ハンドブック』学研プラス.
- ・ 田川元康 (2002)「自閉症者の障害特性と支援のあり方 —TEACCHに学ぶ—」『児童学研究』32号、37-47.
- ・ 上岡一世 (2011) 編著『自閉症支援のための基本シリーズ6 効果的な構造化のアイデア —主体性を引き出す教育支援の実現—』明治図書.
- ・ ローナ・ウィング、久保絃章訳 (2001)「翻訳 自閉症に関する考え方の歴史」『現代福祉研究』創刊号、73-82.
- ・ ローナ・ウィング、久保絃章・佐々木正美・清水康夫訳 (2009)『自閉症スペクトル親と専門家のためのガイドブック』東京書籍.